

B-5 COVID19 肺炎後の難治性肺癰に対してEWS・開胸下右中葉切除術で感染コントロールしえた一例

獨協医科大学 呼吸器外科学

梅田翔太, 中島崇裕, 千田雅之, 眞柄和史, 今村智美, 矢崎裕紀, 井上 尚, 荒木 修, 前田寿美子

50代男性. 食欲不振・呼吸困難感を主訴に救急搬送され, 糖尿病ケトアシドーシス・コロナ肺炎にての診断にてICUでレムデシビル・デカドロンにて治療開始となった. ICU治療で加療行い全身状態安定したため, 転院加療の方針となった. 転院後にCOVID肺炎の増悪を認めて再度当院に緊急入院となった. 再入院時に右中葉に肺膿瘍をきたしており, 経過中に右気胸を発症した. 胸腔ドレーン挿入して経過観察するも気漏持続し有癭性膿胸を認めた. CT検査では右中葉に膿瘍腔の破綻を疑う所見があり, EWSを施行する方針となった. EWSを2回施行し, 一旦は気漏は消失するも再び再燃を認めた. 内視鏡加療困難と判断し, 開胸下右中葉切除術を施行した. 術中所見では右中葉S4に瘻孔認め, 膿瘍腔内には壊死組織で充填されていた. 術後膿胸コントロールされ, 胸水培養3回陰性を確認できている.

COVID感染に伴う合併症として肺膿瘍有癭性膿胸は主要な合併症の一つである. 気管支充填術で治療により改善認めている症例が散見されるが, 内視鏡加療のみでは改善を認めないことも少なくない. 壊死性肺炎に対する肺葉切除は有効な例があり, 本症例では手術加療は有効であった.

B-6 新型コロナウイルス感染症と婦人科薬物治療の中断に関する検討

獨協医科大学 産科婦人科学

添田わかな, 尾林 聡, 望月善子, 長谷川清志, 坂本尚徳, 多田和美, 河原井麗正, 久野達也, 鈴木紫穂, 黒澤 望, 成瀬勝彦, 三橋 暁

【目的】新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言下においては外出自粛を余儀なくされ, 受診控え, 身体活動の制限や自主的な服薬中断さらにフレイルの進行などが懸念されている. その中で, 当院婦人科外来におけるホルモン補充療法(HRT)患者と骨粗鬆症管理患者の受診実態を調査した.

【方法】2019年まで当科の中老年外来に継続的に通院中の患者で, 2020年4月以降未受診のHRT施行者と骨粗鬆症管理者を対象に, 年齢, 治療内容, 治療期間, 重症度, 通院の困難さ, 合併症, 受診中止の連絡の有無などについて後方視的に調査した.

【成績】HRT施行者群は114例中2例(0.88%)が未受診となり, E2貼付剤単剤およびE2貼付剤+DYDの連続療法中で通院30分以上を要する方たちであった. 骨粗鬆症管理群では491例中未受診は9例(1.83%)であった. 9例の平均年齢は 68.4 ± 12.4 (48-89)歳. 受診期間は平均 14.9 ± 8.1 (3-27)年でありHRT既往施行例が6例あった. 9例中8例は骨量フォロー中で, 1例はデノスマブ治療中であった. 9例とも受診中断の連絡はなく, 通院30分以内が4例, 30分以上の遠距離が5例であった. HRT管理継続率は98%(112/114), 骨粗鬆症管理継続率98%(482/491例)であった. 基礎疾患ありが51%であった.

【考察】高い受診継続率は, 不要不急の外出を避けるようにという報道のあるなか, 患者自身が治療の重要性を理解していたと考えられる.

【結論】2020年4月以降受診中断は, HRT2例, 骨粗鬆症は9例であり, 98%が受診を継続していた. 骨粗鬆症治療に関しては薬剤の種類により治療の中断が新規骨折を生じやすくさせる. 骨粗鬆症治療は健康寿命延伸につながる必要不可欠な治療であることを患者と家族に周知し治療継続することが重要である.